

序

経教は之を喩うるに鏡の如し、数しばしば読み数しばしば尋ぬれば、智慧を開発す。若し智慧の眼開けぬれば、即ち能く苦を厭いて涅槃等を欣樂す（序分義）

この善導の教示は、仏教を学ぶことの決定的意味を明らかにしている。仏教を学ぶということは、人智を以て経典を説明することではない。にもかかわらず、敢てそのことをなし得ると思ひ、なし得たとしても、すでに経典は教言であることを止めている。ただ経典に如来の教言を聞くとき、われわれは、自らにおいてそのことに目覚め得ない、自身の究極的願求の心根を照顯せしめられる。そして、往生人としての自身を知らしめられる。ここにこそ、仏教を学ぶ者の無上の喜びと感動とがある。

おもうに浄土の経典は、仏言を仏言として純粹に表顯しているものであろう。なぜならば、人間における究極的願求である願生浄土の至情を教養するものだからである。この度、大谷大学真宗学会は、その機関誌『親鸞教学』において、それぞれに浄土の経典に遇い、それぞれに教言を聞くことを得た領きを、表白のおもいをこめて発表されることになったという。わたしは、その事の重大さを思わずにはいられない。なぜならば、この事こそが、真宗学徒にとっての、すべての教学的営みの始点であり終着点である、と信ずるからである。その教学の営みの方法は各人において異るであろうが、この事が、それ

らの全ての底を貫通してこそ、真宗教学たり得るに違いない。

そして、わたしは改めて思う。真宗教学は、つねに今を始めとして、今現在したもう教言を聞くところにのみ成立つということ。

大谷 大学長

廣

瀬

杲